

内路附近の第三大隊主力を急遽國境に馳せ参す
〜と命ずると共に第三大隊の到着を以て一方の備と
同大隊展開掩護の爲林北台附近にあつた第一中隊と
〜亞界山を占領させて八方山附近の第二大隊と共に
主抵抗線の暫定的の固めをなすと共に泉澤少尉の
指揮する第七中隊の一小隊(三、四名)を半田附近に
推進させて中央軍道上より蘇軍の急進を防止する
の能勢をとらた

午後に入ると零時四十分頃から一時五十分頃に亘つて半田
警察附近は砲撃を受けついで無意加警察は少数
の敵に候の襲撃を受け退更に午後七時五十分頃
には半田警察附近にも敵名の付く候と散見し夜に入ると
蘇軍小部隊逐次越境中の情報が伝はつて来た
右の様な情況下に午後九時 隊長及歩兵砲大隊
本部(大隊長木下大尉)は八方山に到着した

外務省

此の日細雨あり視程五千米を辨あるに過す天は
蘇軍の穩密進迫に組するもの如く見えた

二月十日の戦況

泉部落から急遽北進中の第一大隊主力(本部、第三、第四
及び第一機関銃中隊並に第一大隊砲小队)は大隊長
代理橋田中尉指揮の下に零時より午前三時三十分頃迄
の間逐次戰場に到着し第三中隊(MG二分属)が隊
準備として北山に行つた外は支々する迄の如く右第一
線の配備に付た 即ち第四中隊(長飛島中尉
一小隊員MG二分属)及び第一大隊砲小队を属し後刻更に柿崎
中尉指揮のTA中隊主力を協力せしめらるは師走陣地
に残る第一中隊と主体とする大隊主力は神無陣地
へ就いた

註 第一大隊長小林少佐は南戦前から築城
教育修習の爲旭川へ出張中であつた

十三日午後九時北中山の聯隊本部へ帰還した
又内路附近から多々途中の第三大隊は小笠原少佐指揮
の下に主力を以て、午前七時半頃残余を以て午後四時
頃戰場に到着、夫々予定に従って左方一線とて亞界山
附近の陣地に入つた

更に午後七時頃には北中山附近に聯隊本部を確定し
同時裏に通信、衛生の諸施設も整へられた
此の自前日の細雨は残りなく霽れて朝から蘇機は
青空を恣に飛び翔へ我が陣地を偵察するもの、是
十七機一部は半田附近に投擲した、幸ひ被害は
なかつた

地上に於ては日の丸監視哨は夜に至るまで、数次の攻撃
を受けながら其の都立之と撃退したと云ふ小競合に
終始した

三、八月十一日の戦況

外務省

半田附近 泉澤及び大國小隊の戦況
南戦当初半田附近に派遣された泉澤小隊（第四中隊
の一小隊及びTA一系）は師走陣地に第四中隊の進出するに
伴ひ大國少尉の指揮する其の一小隊と交代せしめられた
を、十一日午前五時、両者の交代を終了し、泉澤小隊は
既設陣地とあり半田警備隊を側へ集結した。此の時に
此の時は既に蘇軍の一部は前方に近迫して、廿二時
たつたらしく、西小隊は勿論、戦車五六輛、砲四五門、
を伴ひ約一中隊と思しき、蘇軍の攻撃を受けた。
西小隊は急遽奮戦力し、特に泉澤小隊は午前七時頃
半田川を越へ、敵の右側背に斬込を行ひ一時其の
火勢を衰へさせた。此の時に小隊長以下七名の戦死と
あり、たが敵は更に二中隊を増加し森林を利用して
浸透し、未夜に入ると共に大國小隊も亦全く敵の
包围する所となる。小隊長は乃ち五名の下、候を敵を衝

て報告に帰る。翌十二日午前十時頃、最後の斬込を敢行した。西方△三四高地にも二時、半次より喊声銃声、小銃の連撃の氣に充ちたと言ふ。此の戦いで、より蘇軍に與へた損害、殺傷、百五十名以上、我は戦死將校二、下士官以下二〇、戦傷九、行方不明五であつた。之其の他の戦況

半田方面の戦況、右の如く、上拘らる、中央軍、道西側△三四高地附近には全く敵影を見なかつた。及し幌内川左岸、知志代、監視哨は十一時頃、敵一小隊の攻襲を受け、通信社配した。之より先七時頃、工兵に栗山道（幌内川西側併行道路）上、亞界川の橋梁爆破を命じ、古屯を去せさせた。此の戦いは、実は手後、蘇軍の有力な機械代部隊は既に幌内川を東方から渡過した。後であつた。ソの北にして古屯部落附近の右側北岸に對し、相當の脅威を予感する。此の自朝古屯に到着した。

外務省

輜重第二大隊（長山鹿大尉五、六中隊員）を、林北谷との間の彈藥及び糧秣の輸送を任した。古屯附近の警備に當つた。

此の自引續き、快晴、敵機延五九機は、中央軍道上八方山入口及び半田附近に、威力搜索的爆襲を加へた。

八月十二日の戦況

一 師走陣地の戦い

半田附近の蘇軍は、逐次兵力を増大し、八月十二日十二時頃、其の先頭、亞界川に達し、直ちに一〇一五福三四門は、師走陣地を砲轟、其の掩護の下に歩兵及び戦車の近迫を開始した。之より先、北斗山附近に倒射陣地を占領した。山砲は十二時半頃から急遽活動を開始し、此の敵に對し、初発から極めて有効な射撃を送つた。為敵は、再度に巨砲及び覆攻襲前迫を試み、たかゞ遂に不成功、亞界川口北の地区に後退した。

敵は此の射撃の根源をつつとめんとし、空中偵察をするに共
に七星北極北斗八方山等に搜索村寨を行つたがこれ
亦不首尾に終つた

古屯部落附近の戦い

先に幔内川右岸に進出した敵の一部は此の白朝から我が
一部の手候と接觸しつゝ午後三時頃古屯部落附近に近
迫し来た。我が輜重第二大隊は当初古屯部落東側
にあつて警備に任じたが後に古屯川北岸に集結し大
隣山麓大尉は向地視察隊の一部、憲兵等をも併せ指揮
し、背後の安全に力め、夜に入るや敵の一部は古屯兵
舎と幔見台との中間地区に進浸透し来るに至つた。

右の師走及古屯部落の戦いに於いて敵に與へた損害
は人員殺傷一〇以上、我が損害は戦死將校二、下士官兵
二五、負傷十八であつて、我が右側北背の脅威は愈々痛切
になつたので、八方山に在つた歩兵砲大隊長木下大尉と

外務省

神無陣地に派遣し、右第一線を指揮せしめることゝした
。八方山方面の戦況

十二時頃八方山北方の監視部隊は△三一四高地に撤收先
に同高地並出の向地視察部隊の主力に合した。

其の後午後九時に至る間に於て△三五六高地にあつた藤岡
中尉の指揮する向地視察の一小隊は迫撃砲を伴ふ敵約
一中隊の包围を受け之と交戦しつゝ△三一四に集結した
。此の戦いで敵に與へた損害約三〇、我が損害戦死二、戦傷
四であつた。

その他

此の日空中は戦爆合計二八機を算する程をわあつたが、
分にも古屯附近に騒がしいので、聯隊長は予備隊たる第三
中隊から大山少尉の指揮する一小隊を此の敵寨の為に
派遣した。

五、八月十三日の戦況

一 師走陣地の戦斗は第四及速射砲中隊の玉碎
師走陣地は於ては北ヶ山からする山砲の側射と相俟て
一旦敵を臣界リ川以上の地区に撃退したか更に三兵隊
を午前一時師走川の橋梁を破壊すると共に附近に
地雷をも敷設した

敵は此の自未明から再度近迫を開始し午前一時頃から
十乃至十五榴級砲兵支援の下に歩戦協同の猛攻を
開始した我が守備部隊は善戦敢闘再三に亘つて
之を撃退したか敵砲兵の効力は威大であつて重大器
陣地の変換は頻次に行はれはなうなり午後二時頃
には本道上に於ては戦車四輛の突破を見ると共に我が
陣地の右翼は包圍されるに至つた

茲に於て守備部隊は逐次斬込を實施するの止むを得る状況
となり午後九時に至るや第四中隊長飛島中尉速射砲
中隊長柿崎中尉大隊砲小隊長古山少尉以下殆んど
全員も最後の斬込を行ひ壯烈なる戦死を遂げた然し
右第一線の第一小隊及若干の生存者は東南方へ後退
し東軍道道上神無川橋梁附近にあつた第一中隊の
大森小隊に合流した

外務省

本戦中に於て敵に與へた損害人員殺傷一五〇以上戦車
擱坐一 我が部隊戦死將校三 下士官以下不明

二 中央軍道道上神無陣地の撤收
之より先聯隊長は師走陣地の戦況に鑑み神無陣地
の撤收を企圖し午後三時之と北極山に後退せしめ大森
小隊も亦午後三時半現地を撤收せしめた

(註) 神無陣地に於て右第一線大隊の臨時指揮に任じ
るた歩兵砲大隊長木下大尉は聯隊長から北極山
附近へ後退の命令に接するや予が第一大隊本来
の長ならは別とて臨時に他人の部下を指揮して後退した
と云はれては男が立たぬと却て之を聴かうとなつた

か聯隊長は幼見にすすりか如く悔々と諒り向かせ
遂に午後三時撤退することとなりた

3 古屯部落附近の戦い

古屯附近の部隊の指揮に任じられた輜重第八十八聯隊
第三大隊長山鹿大尉は此の自薄暮から彈藥及糧秣
を臂力搬送する為輜重及特設工兵部隊を指揮し
古屯を八方山方面に向つた

此の日の古屯附近に現れた敵は小部隊であつたが行動軽
快神去鬼没的行動か多く我が神経を慥多しのか少くなき
つた此の戦いに於ける敵に與へた損害人員殺傷五〇以上
我が戦死將校一 下士官以下不明

4. 三三四高地附近向地視察部隊の戦い

三三四高地にあつた向地視察部隊主力に対しては午前八時頃
迫重砲及MGを有する敵約一中隊が攻襲し未だか撤退
午後一時より午後四時半の間に於ても亦再々未だ能くあつ

外務省

たか之亦大越大尉が一小隊を以て退却した。然るに
聯隊長は午後八時之に北斗山附近に後退せしめた。
本戦中に於て敵に與へた損害人員殺傷五〇以上
MG鹵獲一 我方戦死將校一 下士官三 兵八
5. 其の他

本日も亦晴天 敵機延約十八機 師走 幌見峠及古屯
附近を銃爆轟を加へ敵砲兵は北斗山 七星山及八方山
附近に間断的射撃を加へた。

尚此の夜午後九時不在中の第一大隊長小林少佐は
北斗山に到着 又上敷香にあつた第二中隊(長
黒田中尉)及い北知床半島にあつた第十二中隊(長
佐竹中尉)一小隊は北知床 一小隊は内陸に残置し一小隊
のみ指揮)は共に古屯に到着した。聯隊長は此の
両中隊に対し速かに古屯に向つて前進同地附近に
進出中の敵の増援を攻襲すべく命じた。

(註)此の古屯附近に居た敵は行動極めて機敏且射撃能力優秀し我が彈藥糧秣搬送中の自動車を奪ひし一車の下に制止せしむるに似つた具合で聯隊本部に於ては此の敵兵力を頗る過大視し或以は戦況比較的緩なる第三大隊を一時此の方面へ転用し此の敵を駆逐せねばならぬのはないかと考へて拵た矢先第一大隊長小林少佐は古屯驛下車後當番の迎へる乗馬に打乗り悠々北守山の聯隊本部へ到着し何と周章(る)か余は此の通り何気なく軍道と来たとは思はれぬかと大喝し一に爲憂色は一時にけし飛んでしつた。

六

古屯部 落方面の戦斗

古屯附近に居た敵は十四日早朝来古屯川北岸に陣地点領中の大山、真鍋、西小隊に對し自動火器を以て猛射しつた攻專へ来たが我が部隊は之を惠退しつた。

外務省

古屯橋附近を確保した。

一方古屯から急遽北上し来た第一、第十二中隊及び幹候隊と基幹をつた西坂小隊は早朝古屯部落方面約一〇〇米附近台地に到着大山小隊との連絡後午前八時此の敵の背後に向ひ攻專を開始した。

敵は此の攻專に狼狽せるもの如く交戦一時間余にして東方に後退したか十時後戦車三輛を伴つて及東し茲に全く紛戦を惹起し第一十二中隊佐竹中尉戦死等の事もあり大山小隊方面との連絡も杜絶した。

(註) 實は大山、真鍋の両小隊は古屯部落方面から来た敵にぶつて南方に圧迫され古屯から北上した第一、第十二中隊は之等、兩小隊と友軍相惠を生じた。い、之が為佐竹中尉の戦死をこのこととよく分らない。

午後に至り敵は迫真砲及山砲級の火砲其他兵力を增強すると共に空爆を以て加へて未夕刻に至りには大山小隊等は

古屯兵舎附近に撤退するの止むを得ない状態となつた。

之より先第一大隊主力は到着した大隊長小林少佐指揮の下に北極山にあつたが古屯附近死守の命を受け大隊長は午後古屯着の刻迄には歩兵二小隊憲兵向地視察隊及び榴重の各一部を掌握して古屯兵舎及び其の北方地区に對する配備を完了した。但し第一中隊(長鈴木豊中尉 MG 二大隊砲属)は聯隊予備とされた。(註) 古屯から馳せ参つた第三及び第十二中隊は古屯部活方面と連絡杜絶後第二中隊は一旦古屯(帰還) 気死橋附近の警備に任じて居た。然るに聯隊長の嚴命によりて翌十五日再び古屯を古屯に向つたが遂に聯隊本部に合することをおぼす。其後は行方不明となつた。

外務省

ものは古屯(帰還)したとあるが一般には状況不明である。

2 八方山 北極山方面の状況

昨十三日夕刻三三四高地附近に現れた敵は師走陣地を突破した一部の敵と共に十四日午前九時十分頃から八方山中央第一中隊の面に攻撃した。其時敵は十一時頃再々攻撃した。之亦退却された。

(註) 敵の攻撃方法を見るに突進支援の射撃と歩兵の突進とが層層接して居る。我が防禦火力は有効に發揮し得るばかりでなく突進そのものも亦行動緩慢であつた。加之の如く方法と十七日の停戦及び覆つた。皆の毫も改善の跡を見なかつたのは不思議であつた。又中央軍道を南下する敵は八方山入口及び神無川橋梁附近に放列を布直して五平坂から北極山に對し砲撃を開始した。

(註) 敵は当初八方山附近の丘陵を主陣地と判断せず、只管軍道西側地区を隈見及び古屯に葛橋したものの様子、あつたが十三日夜迄のうさ等高地方面からの側射等の結果、之に対する関心が大となつた様に見える。

3. 亞界川方面の状況

昨十三日以降、断續せる砲轟は受けながら、また敵の来攻を見ない。

4. 其の地

此の日子正前四時、取隊長は八方山に移動した。天候は漸く少雨れ、午後七時の晴れ向はあつたが、朝から霧が深い。素襲敵機は、延十七機を算した。彼表は、なかつた。

又八月十一日、右第一線大隊から、氷遣した。推進奇襲部隊が午後八時、取隊長部へ帰還した。此の報告に依れば、敵は自下幸田へ無意加へ、栗山道と古屯方面に向い

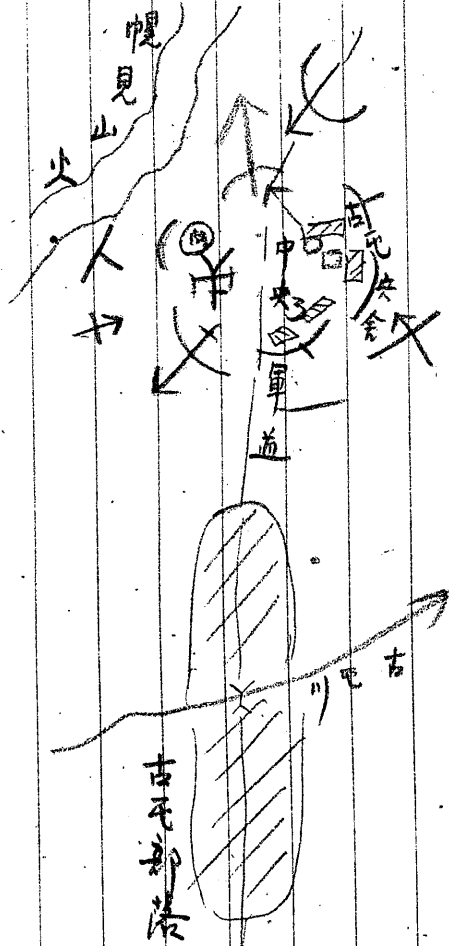
外務省

大量の部隊、彈藥糧秣の輸送中とあると認められる。2. 栗山道上、亞界川橋梁上及び幸田へ無意加道上方向に推進奇襲部隊を、氷遣した。

七

八月十五日の戦況

1. 古屯部落附近の戦況



古屯附近の敵は朝来四周から猛攻を開始した。

我が部隊は右図の如く配置にあり奮闘を續け持た見晴台から陣地を交換した。一隊砲二分隊(長村上伍長)は戦車七輛を擁護せしめ、第三中隊(長橋田中尉)第四中隊生存者及び向地視察部隊の一部(長吉村中尉)等奮戦し、午後二時迄に漸く死傷するもの多し、橋田中尉も午後二時迄に戦死するの状況呈したか幸うして敵を退けて夜に入つた。

之より先、大隊長小林少佐は午前九時迄斬込かによる状況を緩和せんとし、電話を以て、隊長に報告したか、隊長は死ぬのはソレも出来ぬ。出来ぬだけ奮闘し、出血を止へよとして之を中止せしめた。

2. 八方山 亘界山方面の状況
八方山附近は正面に敵の緩徐なる攻襲あり、亘界山方面には敵を見ず。

外務省

只古屯方面の戦況に鑑み、北極山と比斗山との間隙肉鎖の爲、向地視察の一小隊を配属した。

3. 其の地

此の日朝濃霧たつたか向しを晴れる。但し未だ敵機は十一機に過ぎない。

八月十六日の戦況

1. 古屯部 落方面の戦況
第一大隊長以下死闘古屯兵舎を中心とする、狭隘な地区に我を包圍した敵は、朝来、粗重砲、山砲、戦砲による猛射を開始したのみならず、空中からの銃爆薬をしばしば午前十一時頃には相手が急迫した状況呈するに至つた。大隊長小林少佐は乃ち各隊に対して前面の敵の弱兵を選んじ、逆襲すべしと命じた。大隊長亦自ら戦死者の銃を携け、MG大隊砲TA隊重力を率ひ西北側の敵に対して斬込と散行した。此の敵は狼狽し、戦中三十分行、四散したか大隊長

の旧位置への復帰の途次、東方より近迫して来た敵を
殊戦を生じ先づ第一機関銃中隊長重傷にのちず
奮戦中、再々敵彈を蒙りて戦死し大隊長も亦頭部
に敵彈を受け、殪れ大隊副官岩貝小尉續り戰場
の露と消えた。時に午後二時三十分ありあつた。

之より先、午前九時三十分大隊長は向地視察隊吉村
中尉より機密書類及び重要書類を携行し、
既隊本部へ復帰を命じし。又吉川並計中尉も
所在の敵に斬込み、敵を突破し十七日朝八方山に
到着した。

本戦中に於て敵に與へた損害は、人員殺傷三〇名以上
戦車一輛坐四〇輛、我が損害戦死將校四、下士官六
一〇〇名にあつた。

二、北極山附近の戦中、歩兵砲大隊長木下大尉以下の奮戦
古毛附近包圍中の敵の一部(約一中隊)は暗夜を利用して

外務省

北極山及び七星山の間、地区から浸透して午前八時十分
頃、北極山及び七星山附近の我が背面陣地の攻奪
を開始した。北極山にあつた歩兵砲大隊長木下大尉
(本部のみ)第一中隊並に七星山と北極山との間隙肉鎖
部隊による向地視察隊の田島小隊は之を退き、田島
小隊の藤岡中尉は正午頃戦死した。午後二時次には
彼我の距離約百ニミキ未と有り損害續々下る状況を示し
また、木下大隊長及び第一中隊長鈴木中尉は、独断
出撃を決意し、小隊を率ひて敵の左翼に突入した。
敵は一時動搖を生じ左翼に於ては忽ち北走する者も
生じたが、右翼方面から俄かに転射した迫撃砲彈
により、木下大隊長鈴木中隊長以下全員戦死
するの慘狀を呈した。時に午後四時十分、以後第一中隊
第二小隊長小室少尉が、代りて全般の指揮に任じて
夜に入つた。

3. 八方山方面の戦斗、第七中隊の奮戦

此の日前、七時頃、約一小隊の敵が八方山中央支隊たる第七中隊（長田代中尉）の面に侵入し、かけたか、忽ち退却し、たか、早坂から、此の陣地に対する敵砲弾の落下は逐次熾んとなり、敵歩兵の進出も亦多しとなり、或は夜に入り、夜籠衣の企圖があるのは、ちか、と疑はれるに至つた。そこで、田代中尉は中央支隊に全火力を集中、發揮して防集戦斗をやり、約二時向けて此の敵を悉く退却せしめた。

4. 其の他

(一) 亞界山方面に對しては、敵は漸く同心を持ち、たか、逐次下候を散見する様になつた。そこで、八方山との間隙を突破せしめ、稽えて第九中隊を林麓等に転用した。

外務省

(二) 敵の攻勢も愈々熾烈を加へて来るに、伴ひ中央軍道上に於ける敵車輛及び人馬の往來は、頻數を極め、之に對する我が山砲の射撃は、相當の効果があつた。

(三) 輻重隊は古毛附近の戦況上、軍道からする補給が困難に陥つたので、八方山二部、中気屯一気屯、道を氣屯若くは上敷音から補給すべく、氣屯に向つた。

九

八月十七日の戦況

和軍の大詔に伴ひ、自衛戦斗に轉換、午立前、三時、聯隊長は、和軍に對する大詔を煥發せしめ、たか、初、師団命令に基いて、自衛戦斗に入ることにした。但し、敵の進出に際しては、断平、退却することに快意した。

2. 北極山、七星山附近の戦斗

北極山に對しては、午前八時頃、昨日に引續き、砲撃に呼ぶえ、敵の攻勢を見、たか、午後二時、退却、午後三時、再、敵の攻勢があつたか、午後六時、退却し、夜は、

射撃の応酬のみは終始した。
又七星山正面にも約一小隊の敵が現れたが交戦二時
間以内は退却した。

3. 八方山方面の戦い

八方山方面に於ては午前四時頃約一中隊の敵の真面目の
攻撃を受け又午後四時頃大型戦車を伴った敵の来襲に
かあつたが午後七時頃にはついに退却した。然し
終日砲撃は同山陣地に集申した。

4. 其の他

右の外、追撃砲を有する約一中隊の敵は、亞界山と
林北台との中間に進出したが別段の異状を認めな
かつた。

十. 八月十八日の戦況

1. 北極山の戦い

午前九時北極山に敵約一小隊が侵入した。たが刻退却した。

外務省

2. 八方山方面の戦い

八方山方面に於ては早朝敵は我が陣前約一〇〇米
に近迫するに火力を奮揚し午前六時頃より八時頃
にかけて一中隊強の敵は戦車二を伴って侵入し
来たが我は敵戦車一と拘坐其の地歩兵に多大の
出血を與へて午後五時頃ついに退却した。此の間
敵砲火の大部分は吾陣地の面に集申した。

3. 亞界山方面の戦い

一亞界山方面に於ては午後三時頃戦車三を伴った敵約二小队か
ま襲したが、敵隊砲の猛射にうしろを戦車一と拘坐せしめ
等々奮闘の結果午後五時頃迄には悉く之を撃退した。

4. 戦い中止、局地停戦協定

之より先、隊長は午前三時戦い行動停止の命令を
受け午後三時大隊長小笠原少佐は軍使として派遣
するに決す。

小笠原少佐は乃ろ、聯隊副官湯谷大尉、向地復泰隊長、大越大尉、通信兵四、刺以平四、本部書記三及山衛生下士官ニ合計、十五名トオテ、津無陣地北方約一。。未の地点に於て、蘇軍の軍使と稱する、中佐以下三名と會し、其処に湯谷大尉、大越大尉を殘置して、此は、幸田警務長、蘇軍第五七師団司令部と判断し、に於て、樟太進駐し、蘇軍司令官、ヒアックフ、近衛少將と面會、局地停戦に、向て交渉した。

右會話の結果、日本軍各部隊は、明十九日午前六時迄に各陣地に白旗を掲げること、に決定する。但し、八方山の聯隊本部へ帰還し、見ると、其処には、逆に、蘇軍から軍使として、將校三名が、来るなり、彼等は、明朝十時に、白旗を掲ぐべく、指示したる、其の時間に行ふ事、ここに、した。

十一

八月十九日の状況——武装解除

外務省

此の日子、前十時、武装解除、降り、為、全員、北極山附近に、四列、縦隊に、整列する。將校は、全部、佩刀、乘馬、本分者、は、全員、乘馬、一、古屯神社の所に、移動し、中隊、中隊を、令解する。兵に、將校、下士官、兵、毎の、各階層、別に、令離し、兵、令に、收容された。又、各階層、毎の、交通、連絡、を、嚴禁、せられた。此、蘇軍、は、此の、日から、兵に、對して、五、名、の、約、十、名、向、地、の、政治、教育、を、開始、した。

十二

八月二十一日の状況

八月二十日、蘇軍、の、団長、アリモフ、少將、から、聯隊長に、對し、全員を、捕虜とする、目的の、通告、が、あつた、その、全員

相当に印奮の色を見えた。

翌二十一日、隊隊長は日本習慣と一々の遺骨の重宝性を
と認めて、戦場掃除を交渉した。結局古屯橋から古屯
驛の間及び古屯川遺隊兵舎附近を一回り掃除した
のみで、大なる成果は得られなかった。

八月二十二日古屯を徒歩して上敷香へ移動する
ことになった。

十三

本戦中を通わった考案事項

一、本戦中、向に於ける我が主要部隊の損害

歩一二五の第一大隊 戦死約 二五、負傷約 五。

全 第二大隊 " " 六〇、 " " 五。

全 第三大隊 " " 七 " " 二一三。

二、祖谷に於る敵兵力

古屯部落附近戦中に使用した兵力約五六大隊

八方山、北極山、七星山方面 " " 二三大隊

外務省

大砲 戦車等の配置

半田一師走陣地道上 砲戦車 三一輛

師走川北側 十糧級大砲 一〇一一二内

軍道一〇三三四高地道 十糧級加農 一〇内

軍道一〇三三四高地道 十五糧級榴弾砲約 五内

半田警備系西側 一〇一五糧級榴弾砲約 二内

三、蘇軍將校の遺骸等による考案事項

(一) 蘇軍一〇三三四高地の南下は極めて急峻なり、各軍種

車輛が道路上に充満して、故に日本の爆薬車、

一機でしまたる大損害を蒙つたにあらう。

(二) 蘇軍は八方山に主陣地があつたことに気がつかず、かつ

たつて、慢見山及び古屯(はかり突入)して来た。若しも

八方山附近から側面へ攻勢にあつたらう、大打撃を受け

たであらう。

(三) 日本軍は上敷香以北に一師団あり、豊原には別に

軍司令部に於てあるものとして考へて見た。

(四) 此縣軍の損害は戦死約一〇〇名に其中隊の如きは
一〇名中残つたものは僅か三〇名となつたものもあると
お懐して居る。

又古屯附近第一大隊長以下の奮戦は余程猛烈を
極めたものと見之此の兵力を少くも一隊隊と見ても我が
実兵力を固く及んで居るに却て信じて居るにちがひな

十四

歩一二五軍旗御処理の経緯

聯隊長は八月八日軍旗奉焼を決意すると共に自身も
斬込を奉へたか其の後奉還するが止むを得ずは奉焼
するやうな電報あつたので其の夜聯隊旗手式部
靜雄少尉軍旗を令解して背臺に奉納の上護衛
下士官四名を附し更に第三機関銃中隊長伊勢中尉
誘導へ方山一亞界山一ニ部一氣毛一上敷香子をも
遠く豊原方面へお寄せさせた。

外務省

ところが一月は亞界山麓附近に敵襲を受けはるかに
なつた。殊に誘導將校であつた伊勢中尉は旗手も
見失つたので二部一氣毛道を捜し更に中氣毛
から山を越へて西海岸の西柵丹におよぶから比名好迄
行つて丹山を越へて泉部落から内川に入り八月三日
同地の炭坑山砲八八の三拾見習士官と會するに及んで
事の経緯は明白となつた。

即ち式部小尉は亞界山麓に敵襲を受けながら
護衛下士官たる竹鼻及び浅野の両曹長を随へて山路を
泉部落附近迄進み其の南方約六軒の麦畑中の一軒に
休息した。所が其の休息中蘇軍の襲撃を受け、遂から
此れあり射殺された。軍旗を奉納した皆重表は
小供用のリニアランプに入つてあつて其の表のストロウを八月三日
通つてあつた。三拾見習士官は其のリニアランプを八月三日
其の表を見直し且つ附近の畑中に誰かに建てた式部少尉

戦死の地の墓標を見た。

三岳見習士官は、事の重大を覚悟し旗布の中一才平才位のものと旗をと切りとり、他を奉焼した。式部少尉の背裏にはカソリシタエも一緒に入ろうとした。三岳見習士官は旗布の一片一旗、旗の玉、及び勅語を大切に奉持し、内川の突坑へ働きに入つた。

伊勢中尉は、左の経緯を知ると共に、三岳から前記の作戦を譲り受け、泊岸の突坑へ入つた。其の旬九月十三日、新田の招魂社の極く埋め奉つたが、後、第一大隊長小笠原才佐の注意で、二層の一片の外へと泊岸へ奉焼した。尙旗幹は、同じく泉部落に地方人が拾得し、之を九月五、六日頃同地附近に橋梁修理作業中の工兵第八十八隊隊長東島才佐に届けた。同隊隊長は之を処理し奉つた。

(註) 伊勢中尉は、十二月上旬、一回帰還船で帰郷

外務省

(釧路市錦町五、五住)

第二款 気屯附近残留部隊の戦斗

気屯附近に残留した約四〇〇名^ノ部隊(古屯から八月十五日帰つた
 オニオニ中隊のしりし一部入りし^ルものと思はれる)は杉木
 中尉指揮の下にあつたが八月十九日古屯方面から溢れ南下に
 また一部の蘇軍部隊と気屯国民学校に停戦交渉の結果
 條件に不満を懐き同夜急遽気屯にあつた彈藥糧食
 等を全部一気屯一西柵丹道上的の中一気屯附近の二四一高地へ
 運搬し後気屯兵舎及び將校俱樂部等を焼却した。
 又同中尉は同夜古屯方面取隊主力が既に武装解除
 されたに目を承知したるに二四一高地に移り同中尉は全員に対し
 「予は今後此の附近に^テ抗進する蘇軍をやぶ^ルし停戦の
 今日たから予に従ふものは残れ^ル否^クあるものは自己の意志に
 従つて行動する権利に指示した。

外務省

他のものは其の後蘇軍の攻撃を受け逐次西方面へ撤退し西柵丹
 にあつた。其処で^テ分別方面から後退した約二〇〇名の部隊と
 合して約五〇〇と^{ナリ}更に南方面へ^テ転進中北名好附近に
 惠須取附近にも既に蘇軍の上陸を見て其^ノことを知り
 此処に自発的に全員武装解除し解散した様である。

第三款 支那方面の戦況

前記記載事項以外不明

第四款 惠須取方面の戦況

戦況 (附圖第一及び第二参照)

対蘇作戦開始前惠須取水あつた部隊

特警第三〇中隊 (長中垣大尉)

歩一二五MG一分 (大村軍曹以下 六名)

MGは、HMGニカ、現地にあつた。

山砲八八の一隊

二 戦力の実施 兵力の増強

八月十三日朝、蘇軍は上陸用舟艇三四隻を以て

惠須取港附近に上陸を企圖した。我が部隊によつて

退却せしめ、十六日朝、惠須取所北方約三料附近の地帯

に對し砲爆裏に引續いて兵力不明の蘇軍上陸

我が同所民から成る國民義勇戦隊は所北方の

外務省

橋梁附近に下り下す。敵を阻止する為苦闘した。

此の間、第八十八師団は應急措置として右の各部隊を

増派し、取敢へず豊原戦隊区司令部、高級部員

高澤大佐と一、在惠須取各部隊を統一指揮させた。

上敷香残留部隊から

歩兵第二五聯隊の高崎中隊 (初年兵等混成)

(山砲一門砲隊)

内路附近から

歩兵第一二五聯隊第十中隊 (長上原中尉)

真岡附近から

歩兵第一二五聯隊第三中隊 (長朝倉中尉)

右の各部隊は八月十三日乃至十六日の間に逐次に戦場

に到着した。其の大部分は予定に従つて上惠須取

附近の防禦配備につかされた。

敵は十三日以来東、西、南、北、艦砲射撃を実施し

我が惠須取水民約三千人 (約一万人)は惠須取

久春内道及び東へ須取一内路道に陸續避難を待始した。敵機ノ投彈は之等避難民に對しては此れはものは敵をり」として見舞ひられた。然し乍ら其の損害は大なるものではなかつたらしく死傷三四百程を占めて居る。

二 停戦より武装解除ありし。

一 局地停戦交渉

之より先此の方面の雜部隊指揮の爲方面軍から特派された吉野少佐は八月十七日朝、東へ須取に到着し前任者高澤大佐から其の指揮を受け継いだ。此の時既に戦行動停止の命令に接して居たので即日副官青木中尉以下若干名を軍使として東へ須取所北方の蘇軍の許へ派遣した。然し蘇軍は却つて新着の隊長たる少佐自ら来たことと倉皇帰來した。

外務省

吉野少佐は翌十八日朝、青木中尉以下数名を随かえ乗馬下東へ須取北方橋田附近指定の小山へ向つた。

途中威嚇射撃をなしかつたが意に介することなく到着し蘇軍中佐と會見した。先方の要請は「即刻武器を捨てよ」と云ふにあつたが「我が方は停戦は武装解除にあらず」として相譲らず遂に先方の「會談終了」と終止符を打たれ一行は憤然と上東へ須取の旧位置へ戻つて来た。

(註) 吉野少佐は平常から露語をよくした爲に會談時に自然露語が口を衝いた。之が爲に蘇軍は彼を自して间谍にあらずやとの嫌疑を懐いたやうなことがある。

二 内路へ向う後退 武装解除

吉野少佐は「近接して居るのは再燃の因だ」と考へて

基り取り敢え、十八日夜から内道道を先づ白雪峽
附近の險に後退するに決し其の夜から直ちに行動
についた。此の夜天候不良、翌十九日は降雨、山路は
難行である上に邦人婦人、朝鮮人などのスパイと思は
れるものが小うるさく、つらいまつた。二十日白雪峽に
たが更に一月間、内路を退る決心を、余中一
警奉言を、一部制止するものもあつたが、断り、

八月二十四日朝、内路に近ところ、無線で、うちを
聴くに及んで、武装解除は決定的なことを知り、更に
暫時にして、師団からの伝令に会し、佐藤勇とあるも
武装解除せよといふ意味の命令を受け、その少佐
は全部隊に命し、速かに武装を解き、武器は
心ゆくまゝ手入れ、後道路の側には、整頓、整頓、
すつとを命じた。各部隊は手入れは勿論、員数表をも
整え、區域を逐つた。そこを急が、取前、

外務省

沿及、一、蘇軍が見えた。彼等の將校は、軍の意外
なのに驚き、且つ喜い、之を接收し、部隊を内路に向
け、めた。

八月二十五日夜、全部隊内路に着。其処には、歩兵第三
六聯隊第三大隊主力が。石も既に接收されて
居た。

三 部隊の損喪

歩兵第一二五聯隊 第十一中隊 行方不明四名
歩兵第二五聯隊 第三中隊 朝鮮人三名
幹健生 逃亡三名
軍紀は終始極めて厳正であつた。

第五款 真岡方面の戦況

(付圖第一及び同第四參照)

(註) 当方面の戦況には古屯方面のものに比し左の三處が著しい影響を及ぼして居るを考へるに當り、觀察上特に注意を要する。

一 古屯方面の部隊は長月日に亘り、防果施設及び準備し且つ防果戦中と訓練して居たのである。此の方面の部隊は早よりしも十日前遅いものは幸い遭遇戰的に戰場に到着し準備不齊な地形不利を蒙つた。

二 古屯方面の部隊は概ね完了した編成に而かも最初から断平たる決意を戦中に入つたに及ぶ。古屯方面の部隊は終戦後のこととして上司の指示によつて八月十八日約一割の古軍次兵を召集解除(除隊)し且つ最初はなるべく穩便に事を処せんとして居た。

三 古屯方面は射界、連絡施設等が概ねよく準備されて居たに及び古屯方面の戰場は敵軍侵入した能き為射撃

外務省

及び通信連絡上頗る不便であつた。

戦中の開始

一 真岡附近戦中開始の歩二五の動靜

歩二五の第一大隊(長中川少佐)は、松合附近に防禦施設構築中、八月八日真岡方面へ転送を命ぜられ大隊主力は十一日同地着、それより付圖第一及び小能登呂から真岡にかけて配備し至急陣地施設に着手した。第三大隊は主力に遅小十三日到着した。此の時、東武取方面の戦況が急を要したるに直ちに同方面へ転送を命ぜられた。

留多加に在る第三大隊は主力の行動に變化はなかつたが、第六第十大隊のみは八月十四日上敷香直接掩護の目的に留多加同地に到り、筑紫參謀の指揮を受けさせることとなつた。

然るに十五日終戦の大詔を受け、十八日上司の命によつて

軍獲奉焼 且つ約一割の古軍火を召集解除した。
翌十九日には二十日十五時乃至十六時の間に歩二五主力は
小沼附近へ集結の命を受けた。

2. 真岡附近に対する蘇軍の上陸と戦いの開始

八月二十日朝歩二五主力は留多加発新場駅へ到着
した時真岡附近新戦況発展の爲輸送を命ぜられた
至つた。

之より先二十日朝五時頃濃霧の真岡港沖に蘇軍の
上陸用舟數艘の近接するを見續りて艦砲射撃
と共に二隻の蘇軍駆逐艦の存在を見出した。
聯隊長山澤大佐は第一大隊長からの右要旨の報告に
基いて同大隊長に対して速かに軍使を派遣して事を
機便に取り運ぶやうに指令した。

蘇軍部隊は午前六時頃から上陸を開始した。
第一大隊長は直ちに副官村田中尉を軍使として

外務省

熊笹峠——真岡道上と真岡に向うに派遣した。

然るに同軍使一行十三名は蘇軍の一部から包囲を受
けた後多分種々の行方違いを生じた為にもあつた。
大部分は射殺され僅かに西三名が逃げ帰つて来た。
爾後は住民も避難する。其の避難する住民が荒貝河の
急坂の途中から蘇軍機関銃の餌食となつて居る
落ちていくと言ふ状況となり附近の各部隊は期せおしく
前面の蘇軍と猛烈な戦火を交へることとなつた。

八月二十日の戦況

兵力の増強

歩二五聯隊長は西能登呂附近にある第二大隊は別として
其の他の主力をなるべく速かに戦場に到着さすべく先づ
第三大隊に逢坂附近への急進を命じた。第三大隊長
藤田大尉は先づ第九中隊を先登として二十日午後五時
大隊本部及第十一中隊は其の時刻には自動車を追及

すく命令した。但し、第十一中隊は、本中へ派遣する
様指示された。

右の外、聯隊長は、小能登岳及び羽母河附近にあり、
第四中隊主力及び歩兵砲大隊主力を、全燬し、真箇
道上の最高地点にある熊笹峠附近へ転進を命じた。

2. 荒貝澤附近の戦中
戦中は先づ本道を中心として開始せしむる内に於ける阿鼻
叫喚の聲は、共に荒貝澤の山麓に於て、逐次散れ、夜に
入つた。

三

八月二十一日の戦況
1. 荒貝澤方面の戦中

荒貝澤正面に対する敵の攻撃は、猛烈を以て、二十日朝、我が第一
線陣地は、敵の突破する所となり、第一大隊長は、第一
線部隊を、約一軒後退させ、然し敵は熊笹の繁茂
した錯雑地を利用して、正午以降、逐次熊笹方面へ

外務省

瀆過するしつを生じて来た。

2. 豊真線及び熊笹峠方面の状況

之より先、第三大隊の先鋒中隊及び第九中隊は、二十日
午前、三時頃、逢坂の聯隊本部へ到着した。但し、午前五時
頃、取り敢えず之を熊笹峠のあたりに、第三大隊長も、同峠へ
退き、第十中隊と共に到着した。第三大隊長も、同峠へ
派遣した。ところが、暫くする中に、熊笹峠方面より、部々
と、真線方面の戦況が、危険を感じられた。第三大隊
隊長は、急遽、富台方面の部隊の指揮を命じた。
そこで、熊笹峠方面に對しては、小能登岳及び羽母河から、
後退して来た、第四中隊及び歩兵砲大隊の主力と、歩兵砲
大隊長菅原少佐に、指揮せしめて、派遣することになり、
同大隊長以下は、午後二時頃、熊笹峠へ到着し、前より
また、第九中隊及び前線から後退して来た、第一大隊の
一部を、しつと、併せ指揮する様指示された。

之より先豊眞線方面にも一部の敵の上陸を見せ、
 十一時頃から宝台西方ループ線附近一帯の撤退し、
 あつた一少隊は砲敷川を有する敵約一中隊の攻勢を受
 けた。之に先立ち、聯隊長は第一中隊長より一小隊
 を指揮して右部隊の救援に赴かせたのである。次いで
 能登峠から、転進した。第三大隊長も正午頃ループ線
 附近へ到着した。此の日の戦いは、軽戦下、夜に入つた。

四

能登峠方面の戦い

荒見川方面第一大隊主力は二十一日も依然據点を保
 持して居たが、何分にも地形上火制が十分でない。敵は
 之を能登峠方面へ濃過して行く。而かも此の白天
 より晴れ敵艦並に海岸に揚陸したと思はれる。重
 砲陣地からは巨弾が能登峠に集中して来る。我が
 第九中隊の一少隊は死傷勿論あり、第四中隊方面に於ては

外務省

敵は砲兵の集中射撃後自動火器の熾盛を火力を棄
 揚し我が陣地を三十米附近に近迫するや、手榴弾を
 投擲し、其の勢が悔り難いものがある。而も我が陣地
 が急造の爲、迷うに陣地に止るとりには死傷が多かつた。
 第九中隊長は陣地を逆襲を併し、陣地を保持に
 力めた。歩兵砲大隊長は長く第一線陣地へ停止せず、
 不利をさける爲、午後三時頃、部隊を後方據点に集結
 した。敵は此の虚隙に乗じて本道方面を迂回し、
 夜下には其の先頭は逢坂より中間地区に到達した。

豊眞線方面宝台附近の戦い

宝台附近に於ては二十一日前半夜中に各部隊と
 掌握し二十一日午前三時頃、配備を始め、午前六時頃
 には完了した。其の頃から前面の敵は展開を始め、ちやうど
 午前八時頃から村裏を開始した。然し約六、七時頃
 の橋梁の隘路は敵にこそ最も痛手であらう。